

氏 名 内田 修一

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第266号

学位授与の日付 2021年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究

論文審査委員 主 査 三尾 稔
地域文化学専攻 教授
川瀬 慈
地域文化学専攻 准教授
島村 一平
地域文化学専攻 准教授
竹沢 尚一郎
総合研究大学院大学／国立民族学博物館
名誉教授
田中 正隆
大谷大学 文学部 社会学科 准教授
岸上 伸啓
人間文化研究機構 理事

(様式3)

博士論文の要旨

氏 名 内田 修一

論文題目 マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究

生活環境の過酷な北部から移住してきたソンガイたちは、植民地期以降、マリの首都バマコで彼らのホッレイ・カルトの実践を維持してきた。このことは、こうした実践の維持には困難（多くの参加者を集める集合的実践の停滞等）が伴っているだけに、ソンガイ移民たちにとっての彼らの精霊憑依の実践の重要性を示唆している。異郷の大都市で実践される彼らの精霊憑依は、ホッレイ・カルトの多様性、他の精霊憑依カルトとの境界の曖昧さ、及び多数の活動組織者の並存と様々な場所での活動を特徴的傾向として示しており、とりわけ集合的実践の減少が問題視されていた。この状況は、様々な出身地から多様な精霊憑依の経験を持つ霊媒たちが合流し、他民族が多数派を占める環境で活動していることと関連していると考えられる。こうした実態に鑑みて本研究は、様々なアクター（個人、精霊、集合体）が織り成す関係性を中心に精霊憑依の実践を記述し、この実践の参加者たちにとっての意義（意味を成し、重要性を持つこと）について考察することを目的に定めた。

上記3つの特徴的傾向は、実践者間での知識・流儀の食い違い等の問題を孕んでいる一方で、彼ら各人の経験の多様性と自律性の発現と解しうる側面を含んでいるため、両義的と言える。このことに加えて、先行研究の批判的検討を通して得られた知見を考え合せて、本研究はバリバールの超個体性の概念を参照し、諸アクターを自律性と個性を備えた実践主体である個体として把握する観点を導入した。この観点からは、精霊憑依の実践は様々な個体の相互行為と（再）形成の過程として捉えられる。

ソンガイの精霊憑依の実践では、人と精霊のみならず、実践者同士の関係も重要であり、そこにはコスモロジーと社会生活の次元が関わっていると考えられる。精霊（ホッレイ）は、異界でもある人里の外部に住む、ソンガイからみた人間に対して他者性が強調された、人智を超えた力を持つ存在であるが、同種の社会性を人間と共有しており、このことは社会関係とそれに付随する価値・規範（道徳性）が両者の間で共通している点に端的に表れている。この意味で、精霊の世界と人の世界（ソンガイ社会）は並行的な関係にある。そして、実践者たちは異なる精霊憑依カルトを区別している一方で、バマコで精霊憑依に関して個人や民族の間に観察される様々な差異は本質的なものではなく、流儀の違いにすぎないと認識していること、彼らの世界観へのイスラームの影響等を考え合わせると、精霊憑依の実践が彼らにとって意味を成し、重要性を持つのは、ホッレイと同一視されたジンやアッラー等がそこに位置づけられた、2つの世界の並行性を特徴とする、地域や民族を超えたコスモロジカルな地平においてであると推測される。

かくして本研究は上記目的のために、この実践を実践主体としての様々な個体の相互行為と（再）形成の過程として捉える視座に立ち、精霊の世界と人の世界の並行性を手がかりとして、都市環境にある実践者たちにとってこの実践がいかに意味を成し、重要性を持

つのかという問いを提起した。

以上の議論に基づいて、本論ではバマコにおけるホッレイ・カルトの実践の全体像を俯瞰した後、人と精霊の二者関係、二者を越えた諸アクターの繋がり、及び精霊憑依の実践を通して（再）形成される集合体に関する事例をとりあげ、データを補足するために農村（ホンボリ郡）の事例も参照して、記述と考察を展開した。

検討した事例からは、実践においては2つの世界に共通した社会関係が集合的個体の（再）形成や新しい紐帯の創出において一定の役割を果たしている一方で、精霊が特定の霊媒と結びついて認識され、霊媒同士あるいは霊媒と他の実践者の間で、精霊憑依に関する関係と社会生活における関係が輻輳する傾向があること、並びにこうした輻輳は精霊憑依の文脈と社会生活の文脈を錯綜させる傾向があることが明らかになった。精霊憑依の領域と社会生活の領域の境界を曖昧にするこれら傾向は、実践者たちが精霊を含む他者たちとの関係性のために、状況に応じて、2つの文脈を横断して精霊憑依を有意に実践する素地を形成しており、この素地ゆえに、2つの領域は積極的に結びつけられ、混交されていた。最も活発な実践者たちの特定の地区への集住の例等を考え合わせると、こうした関係の（再）形成には、実践者たちの多くが日常生活を共有しておらず、また実践の枠組・基盤が日常の生活領域と一致していない都市では、農村よりも大きな意味と重要性があると推測される。

他方で、精霊憑依は「場所が変わればやり方も変わる」という実践者たちの認識、彼らの一部のマンデ系民族の精霊憑依カルトの実践への参加、異なる精霊憑依カルトの間での精霊の同一視、インドや中国等遠方に由来する新しいエキゾチックな精霊に関する語り、都市と農村の違いを超えた一般性を持つ精霊と人の間の庇護-従属の関係等からは、普遍志向的と呼びうる性質を備えた、そこにおいてこの実践が展開するコスモロジカルな地平が浮かびあがった。

以上のような議論から、本論が冒頭で提起した問いに対して導き出した答え（結論）は、精霊の世界と人の世界の並行的な在り方は、実践者各自の経験、ローカリティや民族の違いを超えた、非-人間である精霊を含む諸アクターの相互行為が可能となる地平を開いているのみならず、実践の次元で精霊と霊媒が結びつく傾向と連動して、精霊憑依の領域と社会生活の領域の接合、混交、相互作用を促進し、かつこれらのアクターのエートスと循環的に再構成し合うことにより、これらの領域にまたがった個的及び集合的な実践主体の相互行為と、状況に応じた暫定的な（再）形成を支えている、というものである。

本研究の意義は主に、サヘル地域に関する精霊憑依研究においてほとんど詳細な記述と考察の対象とならなかった大都市における実践を、長期の集中的な調査に基づき、研究対象の特徴との関連で構築された独自の視座から記述・考察したことによる民族誌的な貢献にある。一見したところ把握し難い調査地における精霊憑依の実践をその特徴に即して記述することのみならず、実践において精霊が特定の霊媒が結びつく仕組み、及びこうした結合が精霊の世界と人の世界の並行的な在り方と連動して、精霊憑依の領域と社会生活の領域が繋ぎ合わされたり、混交したりする仕組みの解明は、とりわけ様々な実践主体を個体として捉え、これら個体の相互行為と（再）形成の局面に注目することで可能となった。

また本研究は、精霊憑依が「セラピー化」しつつあるという既存の仮説をとりあげ、本

論で得られたデータ・知見と突き合わせることで、同時代の精霊憑依の動態に関する学術的議論に参加し、この仮説が先行研究の知見を取り入れて示している、都市では精霊憑依は苦悩する周縁的な人々に対する心理-社会的次元でのセラピー的な機能を担うという見解に対して、全く異なる都市における精霊憑依の実践の像を提示した。すなわち、個人、地域、及び民族的差異を超えた普遍志向的な側面を顕著に示す一方で、精霊憑依の領域と社会生活の領域を結びつけたり、重ね合わせたりして、アクターたちの関係を状況に応じて形成していく側面が重要な意味を持っているものとしての、都市における精霊憑依の実践の姿である。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 内田修一

Title
論文題目 マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究

本論文は、西アフリカ・マリ共和国の西部から首都バマコに移住したソンガイの人びとが行うホッレイ・ホーレイと呼ばれる精霊憑依の実践を対象とし、旱魃や内戦とそれに続く移住という困難な生活状況の中でも精霊憑依カルト（ホッレイ・カルト）を維持する人びとにとって、憑依実践がいかなる意義を持つのかという問題を文化人類学的な手法によって解明した論文である。論文の基礎となるデータは、出願者である内田が 2011 年 10 月から 2012 年 11 月、及び 2013 年 10 月から 11 月の 2 回にわたって実施した長期現地調査によって収集された。内田はこの期間中にバマコのみならず、ソンガイの人びとの本拠地である西部の村落においてもホッレイ・カルトの事例調査を行っている。

論文は結論を含めて 8 章から構成される。序論にあたる第 1 章ではまず、村落部と比較した際のバマコにおけるホッレイ・カルトの特徴として以下の 3 点を指摘する。すなわち、地域全体で認められるカルトの権威者が存在せず多数のカルト組織者が並存すること、それぞれの組織での精霊や憑依に関する知識や流儀が多様であること、他の民族集団の精霊憑依との境界も曖昧であること、である。先行研究では単一の体系的な精霊憑依カルトの存在が前提とされ、精霊信仰を何らかの心性や社会状況の表象と捉えたり、カルトの活動を政治的社会的な抵抗と関連づけたりする研究が大勢を占めていた。内田は先行研究を批判的に吟味し、ホッレイ・カルトの単一的な体系や意味論を追究するよりはむしろ、カルトの実践への注目を徹底し、そこから実践者たちにとってのカルトの意義を見いだすという研究の視座を提示する。第 2 章では、論文の舞台となる調査地やソンガイの人びとを概観し、ソンガイのさまざまな社会関係を貫く従属―庇護の原則が精霊と霊媒の関係にも現れていることを指摘する。続く第 3 章ではホッレイ・カルトの一般的特徴を整理し、精霊たちの世界もソンガイの社会関係と並行的な特徴によって支配されていることを明らかにしている。

第 4 章から第 7 章では精霊憑依の実践の具体的事例が現地調査に基づいて記述され、このカルトの特性と実践の意義に関する考察が深められている。バマコにおけるソンガイの憑依実践は、霊媒と信者との個別的な二者間関係を基本とする。この関係が親密化すると信者は霊媒と精霊とを同一視するようになる。こうして信者―霊媒の親密な関係は、霊媒を介して信者―精霊関係にも拡大する。人間社会の関係が精霊の世界にも及んでゆく状況を、内田は精霊憑依の関係と社会生活の関係の輻輳と呼ぶ（第 4 章）。このような輻輳的状况は、憑依する精霊が同じ霊媒どうしの関係や、複数の個人と複数の精霊・霊媒が関わる複雑な精霊憑依の実践の場においても見いだされる（第 5 章）。また農村部ではバマコと異なり、村落全体が集団的に精霊憑依カルトの実践に加わるが、ここでも精霊＝霊媒との従属―庇護関係の原則は貫かれており、その意味でバマコに見られるホッレイ・カルトの

特徴との連続性が把握される（第6章）。第7章では、バマコで集団的な憑依実践を行おうとする複数の試みが記述される。内田によれば、霊媒や信者たちが、農村部とは異なり同一の日常生活領域を共有できず集団の実践が困難な中でもそれを試みる理由は、精霊と人間の2つの世界に共通する理念的な価値や規範を集団で顕示的かつ遂行的に実践することを通じて、集団の中にある個性や自律性というソンガイの生のあり方を経験しようとすることに求められる。

最終章の結論ではここまでの論考の論点を整理した後、アフリカ・サヘル地域の都市部の憑依儀礼が「セラピー化」しているという先行研究の中で有力な仮説を検討する。この仮説では、伝統的な共同体から切り離された都市部で暮らしアイデンティティーの喪失や精神的不調に苦しむ人びとを癒し、社会に再統合する機能を憑依儀礼が果たすと捉える。しかし、内田の調査では巫病の癒しのための憑依儀礼が皆無であるにもかかわらず、憑依儀礼は存続しており、この仮説は当てはまらない。内田は、バマコにおけるソンガイの憑依儀礼は、社会への統合というよりもむしろ、精霊や人間たちがその都度関係を結び直す過程において個性を経験するという生の営みに直接関わる点に意義があり、それ故に根強く実践が維持されるという結論を示してこの論文を締めくくる。

内田は、自分の調査村でヨーロッパ人旅行者が拉致され、首都バマコにおいてはクーデターに遭遇するという困難な時期に西アフリカで粘り強く現地調査を実施し、憑依に関する民族誌的データを分厚く集積して論文を執筆した。西アフリカの都市における憑依実践に関する研究はこれまで限られており、内田の論文はその空白を補う貴重な民族誌的論文として高く評価できる。憑依実践に関する主要な研究を網羅的に取り上げ、批判的に検討することで、憑依に関する総合的理解を獲得しており、理論的にも高い水準にある。精霊存在も人間と同等のアクターと捉えてアクター間のネットワークを記述・分析する、社会哲学者であるエチエンヌ・バリバルが提示した全体性と個性に関する理論的考察を論考に組み込むなど、現代的な社会理論とローカルな民族誌的事実を統合しようという意欲的試みも評価できる点である。

その一方、憑依儀礼やカルトの記述とその理論的考察に注力するあまり、ソンガイの人びとの生業や社会構成に関する記述が断片的になりがちである。また儀礼の事例の記述では、会話の分析が中心に行われ、憑依に伴う儀礼実践者の身体や感覚の変容などについて詳細が描き切れていないなど、不十分な点も残されている。しかし、これらは調査・研究の継続によってより高みを目指すなかで十分解決可能であり、本論文の価値を損なうものではない。西アフリカ研究、憑依実践一般の研究への今後の大いなる貢献が期待される。

これらを総合的に検討し、審査委員は全員一致で本論文を博士の学位授与に相応しいものと判定した。